

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月20日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652027

研究課題名（和文）現代ヨーロッパ文学における痛みと共同性の総合的研究

研究課題名（英文）Synthetic Studies on Pain and Community in Contemporary European Literature

研究代表者

対馬 美千子 (TSUSHIMA MICHIKO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90312785

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパ文学における痛みの表象がどのように＜共同性＞の問題に関わっているかについて、サミュエル・ベケットの作品を軸に様々な視点（小説、演劇、思想）から分析を行った。また海外の研究者を招聘し、ベケットと痛みについての公開の研究会を開催した。これらの研究活動を通して日本を拠点とした世界的な研究ネットワークを築くことができ、その成果は英語の論文集、*Samuel Beckett and Pain* (Rodopi) としてまもなく刊行される。

研究成果の概要（英文）：We analyzed how the representation of pain in European Literature is related to the problem of community from various angles (novels, theater, thought), focusing on the works of Samuel Beckett. We also invited researchers from other countries and held symposiums on Beckett and pain. Through these research activities we could establish an international research network based in Japan, which will result in the publication of a collection of essays entitled *Samuel Beckett and Pain* (Rodopi).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	270,000	3,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：痛み、サミュエル・ベケット、現代ヨーロッパ文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、萌芽研究「現代ヨーロッパ文学・演劇・思想における身体的痛みの共有可能性の総合的研究」(H18～20年度)の延長線上にあり、それまでの研究を継続し発展させるものである。H18～20年度の研究の目的は、現代ヨーロッパ文学、演劇、思想における＜身体的痛み＞の表象について考察し、そこに見出される＜身体的痛み＞の共有の可能性を探求することであった。文学、演劇、思想セクションごとに＜身体的痛み＞の

表象についての研究を行い、その成果を様々な国際・国内学術雑誌や国内外で出版された著書、国際学会において発表してきた。3年という期間内で＜身体的痛み＞の表象については有意義な研究成果が出せたが、さらにこれまでの研究成果を＜共同性＞構築の方向に発展させる必要があった。またその研究成果を論文集の形で海外に提示する必要があった。これらを実現し、萌芽研究としての十分な成果を得るためには、さらに1サイクルの研究期間が必要であった。

2. 研究の目的

本研究は、現代ヨーロッパ文学における痛みの表象がどのように〈共同性〉の構築に関わるかについて、総合的視点から明らかにすることを目的とする。

(1) まず小説、演劇、思想のセクションごとに、痛みの表象と〈共同性〉の問題について、サミュエル・ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行う。

(2) さらに3セクションの総合的考察の上にたって、現代ヨーロッパ文学における痛みの表象が〈共同性〉の構築とどのように関わるのか、そしてその考察にもとづき、現代において、痛みに忠実であることから切り開かれる〈共同性〉のあり方とはどのようなものであるか、を明らかにする。

本研究の学術的特色は、①痛みという従来、医学、文化人類学、心理学、歴史学等の研究対象であったテーマを、文学に加え、演劇、思想を含む文化創造活動の総合的な視点から考察する点、②現代社会が抱える社会的病魔や、現代という時代性を考慮し、現代社会との関わりにおいて研究を進める点、③痛みの表象について考察するとどまらず、〈共同性〉の構築という痛みの倫理的、政治的意味を考察する点にある。また、本研究は、文学の研究地平のみならず、演劇、思想の研究地平を拓けるとともに、現代社会において着目すべき現象である痛みと〈共同性〉の問題に文化創造の視点から新たな光を投げかけるものである。

3. 研究の方法

全体の統括者を対馬としたうえで、研究内容を3つのセクションに分ける。すなわち、田尻を中心とする小説セクション、堀を中心とする演劇セクション、対馬を中心とする思想セクションである。この他に海外共同研究者として、Mary Bryden氏(Advisor, The Beckett International Foundation, University of Reading)、Mark Nixon氏(Co-Director, The Beckett International Foundation, University of Reading)が加わる。本研究の顧問であるMary Bryden氏からは、本研究に関するアドバイス、専門知識の提供を受ける。研究方法・計画の要旨は以下の通りである。

(1) 平成21年度：以下の作業を進める。

①研究資料や文献を収集し、その資料整理を行う。

②セクションごとに痛みの表象と〈共同性〉の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行う。

③②の考察の成果を発表し、海外共同研究者との意見交換を行うための研究会を開催する。

(2) 平成22年度：前年度の研究活動の成果をもとに、それぞれのセクションにおける痛みの表象と〈共同性〉の問題についての問題域を確定する。

①研究資料や文献を収集し、その資料をさらに充実させ、資料整理を行う。

②前年度に引き続き、セクションごとに痛みの表象と〈共同性〉の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行い、考察を深める。

③国内外の学会で研究成果を発表する。

④論文集出版の準備を進める。

(3) 平成23年度：過去2年間の研究活動を通して得られた成果を全体としてまとめあげる。

①シンポジウム形式の公開の研究会を開催する。

②論文集をまとめる。

4. 研究成果

(1) 小説、演劇、思想セクションごとに、ヨーロッパ文学における痛みの表象と〈共同性〉の問題について、サミュエル・ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行った。またその分析成果を学会発表、論文の形で発表した。

小説セクション(田尻)：痛みと文学、特に小説の関係について、ホロコーストの文学という観点から考察を行い、いくつかの文献を読んだ。たとえばRobert Eaglestone, *The Holocaust and the Postmodern*はポストモダン思想はホロコーストへの応答であるというテーゼを打ち出したものであり、サミュエル・ベケットの作品を考える上でも示唆的であった。ベケットも、レジスタンスに参加し、友人をホロコーストで失っているなど、広い意味でのホロコーストと類縁性がある。彼の作品にそれがどのような形で現れているかを考察を深める努力をした。

演劇セクション(堀)：ベケットの演劇における痛みの問題を、俳優の身体の痛みという観点から考察し、能との比較を論じた論文を本プロジェクト推進者3名が編集した本で発表したほか、別役実作品などベケットの影響を受けた戦後日本の演劇における痛みの表現についても考えてみた。また、戦争、と

くに第二次世界大戦が作家に与えた影響とその表現について、同時代のフランスをリードしていた思想家で劇作家でもあるサルトルなどと比較対照する作業も行った。

思想セクション (対馬): 対馬は、ベケット作品において表現されている言語経験のもたらす苦痛についてアガンベンの「インファンティア」の概念を通して考察した。ベケットがいかに、言語経験に関わる苦痛を通して、私たち人間とは、本質的に言語以前のものを私たちの生きる言語世界の「原限界」として自らの内にもつ存在であることを示そうとしたかを考察した。またベケット作品において表現される〈女性的なるもの〉と痛みの問題についての分析を行った。さらに、ベケットと言語経験のもたらす苦痛についての研究を進展させ、ベケット作品における言語と音楽の関係について考察した。

(2)各セクションにおいて、痛みの表象、〈共同性〉に関する文献や研究資料を収集し、整理した。

(3)海外の研究者を招聘し、ベケットと痛みについての公開の研究会を開催したこと、そして海外の研究者に執筆を依頼し、同テーマの英語の論文集出版準備を進めたこと等を通して、日本を拠点とした世界的な研究ネットワークを築いた。

①平成22年10月には、David H Jones氏 (University of Exeter) を招き東京大学駒場キャンパスで研究会を行った。Jones氏の講演のタイトルは、“The Conceptual Space: Pain and the Unstable Artefact from Beckett to Boltanski”であった。また平成22年12月には、Jonathan Boulter氏

(University of Western Ontario) を青山学院大学に招聘し、研究会を開催した。Boulter氏は、“‘We have our being in justice’: Samuel Beckett’s *How It Is*”というタイトルの講演を行った。

②また(4)で詳しく説明している英語の論文集の出版を通して、執筆者であるイギリス、アメリカ、カナダの7名の海外研究者の方々と意見・情報交換を継続的に行い、研究ネットワークを築いた。論文集の執筆者として、本研究に参加してくださった海外研究者は以下の通りである。

Mary Bryden氏 (Advisor, The Beckett International Foundation, University of Reading, イギリス)
Mark Nixon氏 (Co-Director, The Beckett International Foundation,

University of Reading, イギリス)
David H Jones氏 (University of Exeter, イギリス)
Jonathan Boulter氏 (University of Western Ontario, カナダ)
Graley Herren氏 (Xavier University, アメリカ)
Peter Fifield氏 (University of Oxford, イギリス)
Garin Dowd氏 (Thames Valley University, イギリス)

(4)研究の成果を英語の論文集として出版するための様々な作業を行った。3人で協力し、執筆者の選定、執筆者への依頼、出版社との交渉、イントロダクション作成、編集作業等を行った。編集作業においては、各執筆者間で異なる表記の統一、出版社の要求に合わせた変更、索引の作成などを精力的に行った。また、3人とも編集作業の過程で自分の論文を読み返し、必要などころに加筆修正を行った。また、ベケットと痛みの関係について、論文集に掲載される共同研究者の論文から多くの示唆を受け、それをもとにさらなる研究を続けた。この論文集は、*Samuel Beckett and Pain*というタイトルでオランダRodopi社からまもなく刊行される。日本の研究者が編者となり、日本を発信地とする英語の論文集を出版することは、国内外のベケット研究において大きなインパクトをもちうる。

(5)今後は、挑戦的萌芽研究「20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象についての総合的研究」(H24~26年度)において、本研究において構築された日本を拠点とした世界的な研究ネットワークを継続し発展させながら、本研究の痛みというテーマの延長線上で、トラウマ表象について考察していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 堀真理子、The Transformation of Kafka in Contemporary Japanese Theater、Journal of The Kafka Society of America、査読有、33rd-34th years、2011、80-89
- ② 対馬美千子、ベケットにおける〈女性的なるもの〉と〈傷〉、論叢現代語・現代文化、査読有、Vol.6、2011、1-16
- ③ 対馬美千子、表象の限界にあらわれる人間—ベケットと言語経験のもたらす苦痛、表象、査読有、Vol.4、2010、206-221
- ④ 対馬美千子、ベケット作品における痛み

と表象の問題、論叢現代語・現代文化、
査読有、Vol. 3、2009、1-24

〔学会発表〕(計 4 件)

- ① 対馬美千子、On the Boundaries between Materiality and Immateriality: *Words and Music and Cascando*, FIRT (国際演劇学会) ベケット・ワーキング・グループ、2011年8月7日、大阪大学
- ② 対馬美千子、アーレントと文学の力、社会思想史学会第35回大会、2010年10月23日、神奈川大学横浜キャンパス
- ③ 堀真理子、Struggling with a Dead Language: Language of Others in All That Fall, FIRT (国際演劇学会) ベケット・ワーキング・グループ、2010年7月25日、ミュンヘン(ドイツ)
- ④ 対馬美千子、ベケットにおける<女性的なるもの>と<傷>、社会思想史学会第34回大会、2009年10月31日、神戸大学

〔図書〕(計 3 件)

- ① 堀真理子、田尻芳樹、対馬美千子、*Samuel Beckett and Pain*, Rodopi、2012、出版決定
- ② 堀真理子、田尻芳樹、対馬美千子、ベケットを見る八つの方法—批評のボーダレス、水声社、2012、出版決定
- ③ 堀真理子、田尻芳樹、*The International Reception of Samuel Beckett*, Continuum、2009、147-162

6. 研究組織

(1) 研究代表者

対馬 美千子 (TSUSHIMA MICHIKO)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：90312785

(2) 研究分担者

堀 真理子 (HORI MARIKO)
青山学院大学・経済学部・教授
研究者番号：50190228

田尻 芳樹 (TAJIRI YOSHIKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20251746